

フランスと日本における行動主義文学

渡 辺 洋

はじめに

行動主義の文学といえば、日本では昭和九年から十年にかけての一時期、衆目を集めながら短命に終った一種の文学運動として理解されている。実際、「行動主義文学」は華々しい論争を展開したわりに実体に乏しく、とりわけ実作化の面で見ると作品が少なかったことは事実である。しかし、短期間であったとはいえ当時の文学界に投じた波紋は大きく、その主張、理論、活動を無視することもできない。元来「行動主義」は「大戦後佛蘭西の思想、文学の主流をなしていた懷疑・不安・否定の傾向に反発して抬頭したものである」という。戦争という悲劇がヨーロッパ全土を非人間的世界の集合体に一変させ、社会に対する、否、人間存在に対する不安を人々の心に植えつけたことはたしかである。そしてこの暗い影は文学の世界にも当然波及していった。名目だけの戦勝国フランスではその傾向が一層顕著であった。フランスは戦後、経済の面で驚異的な繁栄を謳歌したが、それは束の間の出来事にすぎず、文学の世界はぬぐいきれぬ不安と絶望の雲に厚く覆われていた。こうした社会環境を背景に生まれたのが「行動主義文学」であるといわれている。さらに厳密に言えば、一九二七年ラモン・フェルナンデスによって提唱された「行動的ヒューマニズム」(Humanisme de l'action)に端を発したもので、必らずしも体系的にまとまった文学理論、あるいは運動ではなかった。換言するなら、当時フランスで発表された文学作品に共通して認められた思想、様式、文体などの総称であり、従来のダダイズムや超現実主義の絶望的、懷疑的傾向を否定し、意識的に不安や絶望の克服を目標に掲げた積極的なひとつの姿勢であるといえる。つまり、人間の価値の権威と実存を回復しようと

する人間性把握に関する新しい試みであった。フェルナンデスは、「個的人間をその全体性と独自の現実（レアル）の上に見るためにはただ行動的的角度においてのみ可能である」と主張した。これは時期的にいつて絶好の提言であった。実際、フランス文学史上に、今日なおその名をとどめている多くの著名な作家たちによってこの主張は支持されたのである。これをいわゆる「行動主義」として日本に紹介したのが、長年フランスに滞在し昭和六年、帰国した小松清であった。ちょうど文学者の「能動精神」が盛んに叫ばれ出した時でもあり、「行動主義」は日本の文学界に少なからぬ反響を巻き起した。しかし、それほどまでに騒がれ論議されながら、なぜ日本において「行動主義」が短命で終り、実作化に成功しなかったのか。この小論では行動主義の文学といわれている実際の作品を通してその点について考察し、同時にフランスと日本の「行動主義」の文学を比較検討してみたい。

I

フランスを代表する「行動主義」の作家といえ、まず第一にアンドレ・マルローの名を挙げなければならない。一九〇一年生まれの彼は、二十歳になるかならないかという若さで故国フランスを後にし、遠く北アフリカ、アジアへと旅している。しかもそれは単なる「旅行者」としてではなく、行く先々で自分からすすんで政治的、社会的事件に参画するという文字通りの「行動家」としてであった。すでに述べたように大戦を境に人々はあらゆる面での「価値の転換」を余儀なくされたが、マルローはこれに激しく抵抗し、敢然と立ち向うことによって対処したのである。一九七六年十一月、彼は七十五歳で波乱に富んだその生涯を閉じたのであるが、それはまさに「行動に憑かれた男の一生」と呼ぶにふさわしいものであった。創造者と同様に彼の主人公たちも例外なく死を賭して行動し、決して報いられることなくその生を終っている。たとえば、一九二八年に発表された最初の長編小説『征服者』（*Les Conquérants*）に登場する主人公ガリンは、革命運動に情熱を傾注する有能な闘士であるが、彼に未来はまったくない。「……ぼくにきまとして離れない行動欲というものは、行動を離れたすべ

てのものに対しては力を無力にする。それは行動の結果に対してもだ……」⁽²⁾

一九三〇年に出版されたインドシナを舞台にした作品『王道』(La Voie Royale)のペルカンの場合もそれは同じである。「あらゆるものに抵抗して生きるということ……それは死に抵抗して生きると同じことだ……ぼくはときどきぼくという存在のすべてを、それと闘う一瞬に賭けていると思うことがある……」⁽³⁾

このように彼らは生への意味を見い出せぬ人生を生き抜くという無償の行為によってパラドキシカルにその意味をきびしく追求している。彼の人物たちが「行動的ニヒリスト」と称される所以である。彼らは人生が虚しいものであることを十分承知している。だからこそその虚しさの極限、すなわち死と対峙することによって不安や絶望に打ち克とうとしている。マルローの友人であり、彼の作品をはじめて日本に紹介した前述の小松清も次のように述べている。「殊にわれわれがマルローの作品を読んで感じることは、ペシミズム、不安、絶望などがそれらの意識生活を濾過することによって、現実に対する最も熾烈な執着と克服の意欲となって現れ出てくることである」⁽⁴⁾

いずれにしても、文学の世界に現代的感覚を身につけた「行動する人間」を登場させ、フェルナンデスが提唱した「行動的ヒューマニズム」を小説作品の中で最初に実践した作家はアンドレ・マルローである。

「不條理の世界に生きるにしても、あるいは別の世界に生きるにしても要するに生きるということだ。この世界の虚しさを意識することなしに、また、それにとらわれずには力は生まれてこないし、真の生活もないのだ」⁽⁵⁾ (『征服者』の

主人公ガリンの言葉)

マルローより少し前に、アンリ・ドゥ・モンテルランが『夢』(Le Songe, 1922年)、『オリムピック』(Les Olympiques, 1923年)、『闘牛士』(Les Bestiaires, 1926年)といった一連の作品の中で「行動する人間」をとり上げているが、これらはいずれもその題名が示唆しているように戦争やスポーツの世界において自らの行為に情熱のすべてを傾ける若者たちの姿を

描いたものである。十四歳にして闘牛を試み、十九歳で志願して戦線に赴き重傷を負ったモンテルランにとって、スポーツと戦争はあらゆる原始的な情熱を発散するにまたとない場であった。そこではまず何よりも適確に「行動すること」が要求されたが、そこに彼は無上の喜びを見出したのである。したがって彼が描いているのは、激しい闘争心、強固な克己心、他に対する自の優位性などである。

「アルバンは思った。『ついに自分が傷つくときがきた。しかし、かまわない。もし、自分に適切な何かをなしとげることができるのなら、たとえ殺されてもかまわない』」(『闘牛士』の主人公)⁽⁶⁾

また自らパイロットとして定期航空便の操縦桿を握り、一九四四年七月偵察飛行に出たまま消息を断ったサンニテグジュペリも「行動主義」の作家といわれており、作品にはその体験を結実させた『南方郵便機』(Courrier Sud, 1929 年)⁽⁷⁾、『夜間飛行』(Vol de Nuit, 1931 年) などがある。

「『人間の生命は価値のないものかもしれないが、われわれは常に、何か人間の生命に優る価値あるものが存在するかのよう⁽⁷⁾に思っ⁽⁷⁾て行動している。それは何であろうか』」

「老いと死はリヴィエールよりも残酷にそれを破壊する。そのことを考えれば人生には個人的な幸福よりも永続性のある何かが存在するのかもしれない。人間のその部分を救うためにリヴィエールは働いているのかもしれない。もし、そうでないとしたら、行動の説明ができない。」⁽⁸⁾(いずれも『夜間飛行』)

このようにマルロー、モンテルラン、サンニテグジュペリは不條理に満ちた世界に生きなければならぬ人間にとって「行動すること」の必要性を説き、行動の瞬間に人間の真の価値を見い出そうとしている。多少のニュアンスの違いはあ

ても「行動の作家」と呼ぶにふさわしい人々であり、その作品はすべて彼らの実際の体験から生み出されたものである。

その他、若干の名前を加えることはできるがフランスの「行動主義文学」を代表する作家といえ以上の三名であろう。

II

ところで、日本における「行動主義文学」は、前述のとおり昭和九年、小松清がフェルナンデスの「ジッドへの公開状」(ジッドの転向について論じたもの)の翻訳を『改造』六月号に、また「仏文学の一転機」(ジッド、アラン、ブロック、ゲエノをはじめとし、フェルナンデス、アラゴン、ドリュ・ラ・ロッシュ、マルローらによるフランス文学の新しい動向を述べたもの)と題する論文を『行動』八月号に発表し、自らも「行動的ヒューマニズム」(彼によれば「行動主義」)を提唱したことはじまる。小松は昭和五年にマルローと面識を得て以来、深い親交を結び、彼の作品の翻訳をほとんどすべて手がけている。昭和八年「ジッドへの公開状」が紹介される前年―は日本の文壇にとってまさにエポックメイキングな転換の年であった。すなわち、当時の文学界は昭和初年代から隆盛をきわめてきたプロレタリア文学が国家権力のきびしい弾圧の前に衰退のきざしをみせはじめ、数多くの作家たちがいわゆる「転向」を余儀なくされる一方で、プロレタリア文学に対する反動から起ったさまざまな文学集団が内部分裂をくり返すという混乱の時にあった。もっとも逆の観点からすれば昭和八年は文芸復興の年であったともいえる。事実、『文学界』、『行動』、『文芸』など一連の雑誌が創刊されたのはこの年の十月から十一月にかけてのことである。その意味では小松の「新しいフランス文学の動向」や「行動主義」は時宜を得た「紹介」であり、「提唱」であった。これに呼応するかのように船橋聖一が、昭和九年『新潮』七月号から九月号の文芸批評欄で文学者の「意志的リアリズム」を主張し、作家の積極的活動を訴えた。そしてこの運動に舞台を提供したのが『セルバン』と『行動』である。主な唱道者としては小松、船橋の他に阿部知二、福田清人(『セルバン』初代編集長)、豊田三郎(『行動』編集長)、田村泰次郎らの作家、春山行夫、十返肇、窪川鶴次郎らの評論家、同調者として青野季吉、伊藤整らを挙げることができ

る。ところで昭和九年といえはマルクス主義文学運動の崩壊した年であり、「行動主義」は単なる文学上の主張にとどまらずイデオロギー的色彩を帯びた一大論争に発展したのである。昭和十年『行動』新年号に船橋が「芸術派の能動性」と題して「芸術派はその従来の使命であった『抵抗』としての芸術性から、一步を踏み出し、動き出さなければいけない。文学そのものの立場に戻らなければいけない。プロレタリア文学のアンチテーゼの立場ではなしに、ジンテーゼの立場に立たなければいけない」と論じると、マルクス主義評論家の批判が相継いで起った。とくに大森義太郎は、早速『文芸』二月号誌上に「いわゆる行動主義の迷妄」という論文を発表し真向うから船橋と渡り合った。大森の一文は「いわゆる行動主義は日本ではまったくのインチキである」という書き出しにはじまり、フランスの行動主義は知識階級が懷疑、自棄の状態から自らを救おうとした苦闘の尊い所産であるが、日本のそれは「マルクスシズムのプロレタリアートの味方でもなければ、同伴者、同調者ですらもなく、まさに相容れざる敵である」としている。これに對し当の船橋は「能動精神に関する論争について——大森義太郎氏への反駁——」を、また小松は「大森義太郎氏への公開狀——行動主義の社会的展望——」をそれぞれ『文芸』と『行動』の三月号に掲げ論駁している。このように日本における「行動主義」は「文学」そのものよりも「文学論争」として世間の注目を集めたのである。しかし、この間の事情についてはこれまで多くの識者によって論じられているので、ここでは「行動主義」の文学作品に焦点をしばって考察することにした。

III

日本においてはいかなる基準、あるいは判断の下にそれを「行動主義」の文学作品として分類しているのか、定かではないが、一応「行動主義」に基づいた作品とみなされているものを発表年代順に列挙してみる。

田村泰次郎『日月譚工事』昭和九年『行動』八月号。

船橋聖一『ダイヴィング』昭和九年『行動』十月号。『白い花婿』昭和十年『新潮』新年号。『濃淡』昭和十年『行動』新

年号、二、四、六、八、九月号に連載。

芹沢光治良『塩壺』昭和九年『改造』十一月号。

井上友一郎『資本』昭和九年『行動』十二月号。

豊田三郎『弔花』昭和十年『新潮』二月号。

福田清人『脱出』昭和十年『新潮』三月号。

その他、昭和十年『行動』六月号で「行動主義文学特輯」と銘打って掲載した阿部知二『貴族』、芹沢『選手』、豊田『機械記』、福田『河岸』、武田麟太郎『臨時列車』などの短編がある。また一般には「行動主義」の文学作品とみなされていないがそれに近いものとして、たとえば平野謙が「私見によればたまたま当時の能動精神的な文学動向をよく代表するにたる長編⁽¹⁰⁾」と指摘している横光利一の『紋章』（昭和九年『改造』新年号から九月号に連載）や阿部の『冬の宿』（昭和十一年『文学界』新年号から十月号に連載）、船橋の出世作となった『木石』（昭和十三年『文学界』十月号）などを挙げることができ、その数は決して多いものではない。以下、個々の作品について概括してみる。やはり、代表作は『ダイヴィング』であろう。この作品は客観的批評家として著名なバンジャマン・クレミューが「夜間飛行について」と題して書いた一文の「操縦士ファビアン⁽¹¹⁾の『ダイヴィング』のような夜の中へ進入」（傍点は筆者による）からその題名をとり、混乱の世界に意識的に「はばたく」能動的知識人の姿を描いた短編小説である。主人公の文学青年津乃木龍二は突然の父の死によって業績の思わしくない土地会社を相続することになる。しかし、素人の彼に会社の再建などできるはずもなく、結局、私鉄資本に肩がわりしてもらい一から出直そうと決意する。それが主人公にとって真の飛躍につながることを暗示してこの作品は終わっている。万策つきた龍二が箱根に逃がれ、芦の湖で偶然出会ったフランス人の少年と競泳する描写がある。

「こんな山の中の湖水まで逃げてきて、少年と泳ぎっこをしている自分の何と惨めなことか。しかし、ここまで来ればこの孤独の底から滲み出てくる反抗が、勇気というものを生んでくれないであろうか。」⁽¹¹⁾

もっとも、この作品を「行動主義」の代表作として特徴づけているのは、主人公によって語られる最後の言葉である。

「押さへても押さへても崛起してくる素質の内部進化が、外部現実の圧制をつき崩さうとし仕事の責任者としての意思は無惨にも蹂躪されるが、ぼくをもっと有能に生かすための純粋な努力、そしてその道へ突入するための傍目もふらぬ勇氣は、それがどんなに平和な人間の場合でも、意識の上昇を示す。人間の美しい姿勢である」と。⁽¹²⁾

こうして津乃木龍二は自分をとりまく一切のしがらみ―母親、重役会議、家名意識―から逃がれ、文字通り「はばたく」のである。

しかし、作品の中で使用されている用語や表現からのみ考えれば『塩壺』の方がより行動主義的といえるかもしれない。ある有名な法律事務所勤める民事弁護士氷川神吉は二人の幼い子供を残して妻に先き立たれるが、めんどろみのいい義母のおかげで何不自由なく、無為に日々を送っている。あるとき一家は病弱な子供たちの療養と彼自身の気分転換を兼ねて浅間山麓にある温泉に出かける。『塩壺』はこの温泉の別名である。彼はそこで暴漢に襲われながら敢然と一人で立ち向った秋山代議士に出合う。秋山を「死を冒す行動に追いやったもの」⁽¹³⁾の説明として述べられた部分を抜萃してみる。

「『……よし四十七年の命に換えてもと云ふ義憤に、全身が跳ね上ったのだらうな。……』」⁽¹⁴⁾

「その行動への動力である野蛮人の遺産と云ふもの」⁽¹⁵⁾

「その命をなげ出させた『憤り得る力』」⁽¹⁶⁾

いかにもマルローやサン＝テグジュペリを想起させる表現であるが、これは問題の個所のみを抜萃したのであって筋自体

は秋山の果敢な言動に刺激された主人公がいままでの微温的世界から抜け出すというありきたりのものである。

『弔花』は大学講師垂水の野望と挫折を描いた作品で前二作とは趣を異にしているし、『脱出』はある退役将軍が私財を投げ打って創設した少年院を舞台にくりひろげられる教官と不良少年の物語であり、いずれも「行動主義」の文学作品とは認めがたい。その他大同小異で、小説的価値は別にして今日的観点からすればどこが「行動主義」的なのかと疑義をさしはさみたくなる作品ばかりである。臼井吉見も『弔花』や『脱出』と「行動主義」の關係について次のように論評している。

「いまからみると、『弔花』が行動主義に基づく作品とは、意外な思いをする読者が少なくあるまい。(中略)つまりは、インテリを登場させた、都会的な風俗小説の一種とみるべきもの」、「『脱出』は、『弔花』と同じく、当時、一時的な高まりを見せた行動主義文学運動に促されて書かれた作品とみられている……。だが、これも行動主義と具体的にどんなつながりがあるのか、いまにしてみれば、見当のつかないことといつてよい。」⁽¹⁷⁾

実際、平野謙の指摘を待つまでもなく、『弔花』や『脱出』に比らねばむしろ『紋章』の中に「行動主義」あるいは「能動精神」的要素を見い出せるのである。

「……自由といふものはおおよそどんなものかといふことぐらいい知っていないくちや、もうそれは知識人とは言へないんだからね。これからの知識人といふのは、自由の解釈いから始つて来るんだ」⁽¹⁸⁾

「『……おのれの精神一つさへ自由に出来ずに、正義を云々したつて始まらないじゃないか。自由といふのは自分の感情と思想とを独立させて冷然と眺めることの出来る潤達自在な精神なんだ。』……」⁽¹⁹⁾

また、伊藤整によって「判断はすべて外へ向おうとしては屈折した自己否定的になる当時の知識人を典型的に描き出したもの」と評された『冬の宿』にもこの種の描写を随所に認めることができる。しかし、所詮、アンドレ・マルローをはじめ

とするフランスの「行動主義文学」とは異質のものであり、しかもその相違が単にフランスと日本という国柄の違いによるものではない点に注目しなければならない。たとえば『王道』のペルカンと『ダイヴィング』の龍二とではその生き方からもの考え方までまったく違うのである。つまり、死と対決することによって強烈な生を生きようとする前者の姿勢を行動的能動性と呼ぶなら、後者のそれは非行動的受動的能動性といわなければならない。たしかに船橋自身『ダイヴィング』や『塩壺』を能動的精神の完全な実作化ではないとはっきり述べ、今後五カ年計画で完成させたいので長い目でみてもらいたいと訴えていた。⁽²⁰⁾しかし、結局、彼の計画は陽の目をみることなくしに終わったのである。現実の冒険家、闘牛体験者、パイロットの手になる作品と「そうあるべきだ」と頭の中で考えた知識人のそれとの間に質的な違いが認められるのは当然のことである。それを同等に「行動主義文学」とみなし、同じ舞台にのせて論じること自体間違っているといえないだろうか。

IV

以上社会的に一応は認知されているフランスと日本の「行動主義文学」について概観してきたわけであるが、本来、「行動主義」とはいかなるものであり、これに基づく「行動主義文学」が実際に文学のジャンルとして存在したのであるうが。「行動主義文学」の唱道者の一人に数えられている春山行夫でさえ次のように述べている。「問題の焦点は『行動』actionといふ言葉にある。近頃は小松清氏の出現によって、『行動主義』とか『行動のヒューマニズム』とかいふ言葉が流行しはじめているが、これは一方政治的行動を暗示する異常な関心に結びつけられて、一種神秘的な魅力を伝へている。(中略)行動主義といふ言葉から誰れしもがアメリカの behaviorism を想像するだろう。反対に action といふ言葉はあるが、この言葉から出た行動主義といふものを自分は知らない。」⁽²¹⁾そして小松の意見が誤っているとはいわないがと断りながらも、「日本の現状から突然『行動主義』といふことを紹介しても、フランスの戦後文学に於ける反主知主義がそれによって全的に発展させられ、修正され、変形させられた過程が判っていないし、他方に於いて『ヒューマニズム』といってもそのモラルが前に

あげた *action humaine* のどこから出ているかが明瞭にならないと思ふ。⁽²²⁾ また、当時新進のフランス文学者であった新村猛も『世界文化』昭和十年五月号で「氏（小松清）の滞仏中にフェルナンデスが行動主義を提唱した由であるけれども『情報』子は寡聞にして、その後この主義のことにフランスの新聞誌上で言及されたことも沉んやそれが問題になったことも知らないものである。一体、行動主義はフランス語で何と呼ばれているのであるか、示教を仰ぎたい」とし、さらに「大森、向坂両氏ならいざ知らず、岡邦雄氏にまで『行動主義なるものを根こそぎ、フランスのも日本のも併せて全的に否定するものである』などと言はさせたのは何か小松氏の方にも原因があるのではないだろうか」と述べ、⁽²³⁾ 少なくともフランスに「行動主義」が存在しないことを明言している。たしかにフランス文学辞典や文学史をひもといてみても「行動主義」とか「行動主義文学」という項目はもちろん、用語も見い出すことはできない。したがって、フランスにおいてマルローやサン＝テグジュペリが「行動的な作家」といわれることはあっても「行動主義」の作家と呼ばれることは決してない。つまり、「行動主義」という用語自体小松によって造られた日本独自のもののなのである。加えて「行動主義」と船橋らのいう「能動精神」はある共通項を持っているかもしれないが、別個のものであるのにこれを勝手に同一視したことにも問題はある。事実、「能動精神」の名付け親青野季吉は、これを「懷疑、不安、動揺、焦燥のなかにちぎこまっているのに堪えられなくて、またそれが許されなくなって、ようやく能動的な立場へと自己を鞭打って来たこと」と定義し、⁽²⁴⁾ 能動精神が一個の能動主義としてフランスにおける行動主義の日本版のように取り扱われていることの不当性を指摘している。すでに述べたように小松の紹介したフランスの「行動主義」も「懷疑・不安・否定などに対する反発から抬頭したものであった」ことは事実であろう。また「不安の思想に棹した精神が、その精神行動自体のうちに、フェルナンデスやマルロオの（何よりもまず行為によって、そして行動のうちに）というイデオとその価値を把握したのである。この心的論理の発展は行動主義の本来的意義を規定する上に不可分離のものである」という見方も正しいにちがいない。⁽²⁵⁾ ただ、懷疑や不安、否定を克服する対処の仕方において両者は異っている。しかも、それが「行動」と「能動」という用語の上ではきわめて類似した言葉でもって表現されたため

に、日本のいわゆる「行動主義」の定義をあいまいなものにしたのである。言い換えれば、元来フランスに存在しない「行動主義」が日本に導入され、「能動精神」と混同されたものが一般にいわれている日本の「行動主義」であり、これに基づいて書かれた作品が「行動主義文学」なのである。したがって日本ではフランス的な意味における「行動主義」の文学作品は書かれたことがなく、せいぜい知識人の非行動的受動的能動性を描いたものを「行動主義文学」と称しているのである。

このような観点に立つて考えれば、死を強烈に意識して生きるマルローや一秒、一センチメートルの差にすべてを賭けるモンテルラン、危険と隣り合わせの人生を歩んだサン・テグジュペリの作品と大きな隔りをもつ単に利己的なインテリの生活を描いた『弔花』や不良少年にふりまわされる教師をとり上げた『脱出』などが「行動主義」に基づいた作品として分類されている理由も納得できよう。

能動的精神の実作化をその後も心がけた船橋が、昭和十三年に発表した『木石』はこの種の小説として最後の作品となっている。ある細菌学研究所を舞台に、研究の完成をみるまでは一切の人間的な愛情に溺れまいとする二桐医学士、木石と嘲笑されながらストイックな愛に生きるその助手追川初、彼女の養女で実は初の敬愛したR博士の隠し子襟子、この三人の人物が織りなす人間模様を描いた短編小説が『木石』であるが、作者船橋はこの作品でも知識人が社会の中で能動的に生きることの必要性を強く訴えている。しかし、同時に彼は「行動主義文学」の行きづまりを実感したのである。

最後に桑原武夫がマルローに関する論文の中で日本の「行動主義文学」についてふれているので抜萃しておく。

「マルローはこの二作（『征服者』と『王道』をさす）において行動的ニヒリズムを追いつめるために、ガリンとベルカンをえらんだ。したがって彼らの勇氣にみちた英雄的行動も、これを支えているものは、ほかならぬ人生の無意義性への確信なのである。日本でも一ころ行動主義文学というものがとなえられたが、たとえば『人生にあたえられた究極目的の欠如が行動の條件となった』というような言葉がどれほど理解されたのだろうか。」⁽²⁶⁾

いずれにしても日本の「行動主義文学」は、小松が紹介したようなフランスのそれとは似て非なるものであり、その実作化においてはあくまでも日本の「行動主義」に基づいたものである。つまり本来的な意味、フランスの「行動的ヒューマニズム」にのっとって書かれた作品は皆無ということになる。作品が存在しなければ、その文学も存在するはずはない。要するに、フランスの進歩的な知識階級が一同となって推進した社会的行動とたまたま高揚しつつあったわが国の能動精神が皮相的に結びついた結果生じたのが日本の「行動主義文学」であるといつては過言であろうか。そして文学運動としてもそれが短命で終った理由もそこに見い出せるのではないだろうか。

註

- (1) 小松 清、『行動主義文学論』『行動主義の諸問題』（紀伊国屋出版部、昭和十年）十二頁。
- (2) André MALRAUX, *Oeuvres Complètes, Romans, Les Conquérants*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1947, P. 143.
- (3) MALRAUX, *La Voie Royale, Le Livre de Poche* 1964, P. 108.
- (4) 小松 清『前掲書』一六頁。
- (5) MALRAUX, *op. cit.*, P. 152.
- (6) Henry de MONTHERLANT, *Romans et Oeuvres de Fiction non Théâtrales, Les Bestiaires*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1959, PP. 554—5.
- (7) Antoine de SAINT-EXUPÉRY, *Oeuvres complètes, Vol de Nuit*, Gallimard, Bibliothèque de la pléiade, 1959, P. 121.
- (8) *Ibid.*, P. 121.
- (9) 『人間の條件』の主要人物の一人に日本人とフランス人の混血児清（キヨ）が出てくるが、これは小松清の清からとったといわれている。
- (10) 平野 謙、『昭和文学史』（筑摩書房、昭和五十年）一六七頁。
- (11) 船橋聖一、『ダイヴィング』（『行動』昭和九年十月号）三四〇頁。

- (12) 同右書、三四二—三頁。
- (13) 芹沢光治良、『塩壺』（『改造』昭和九年十一月号）十五頁。
- (14) 同右書、十六頁。
- (15) 同右書、十六頁。
- (16) 同右書、十六頁。
- (17) 臼井吉見、『解説』（『現代日本文学全集87』『昭和小説集□』、筑摩書房、昭和三十二年）四一〇頁。
- (18) 横光利一、『紋章』（『現代日本文学全集36』『横光利一集』、筑摩書房、昭和二十九年）二七一頁。
- (19) 同右書、二七一頁。
- (20) 船橋聖一、『芸術派の能動性』（『行動』昭和十年新年号）二二六頁。
- (21) 春山行夫、『文芸時評』（『行動』昭和九年十一月号）一六六頁。
- (22) 同右書、一六八頁。
- (23) 関口 弘（新村猛のペンネーム）、『フェルナンデス・行動主義・『作家聯盟』（『世界文化』昭和十年五月号）四七頁。
- (24) 青野季吉、『能動的精神の抬頭について』（『行動』昭和九年十一月号）十七頁。
- (25) 小松 清、前掲書、十七頁。
- (26) 桑原武夫、『フランス文学論』（筑摩書房、昭和四十二年）三六一頁。